

サポート・ご協力 ありがとうございます

■平成20年度新規・継続会員(敬称略・順不同、2008年8月1日～9月30日)

(正会員)

浅見紀夫、エルネット仙台、岡田真秀、大滝精一、片倉玄、子ども虐待防止ネットワーク・みやぎ、(特)蔵王のブナと水を守る会、(特)せんだい杜の子ども劇場、(特)東北マンション管理組合連合会、中津涼子、西出優子、沼倉雅枝、長谷川公一、

(特)みやぎ発達障害サポートネット、山田晴義、渡邊兼光

(準会員)

片平たてもの鷹援團、くらしきパートナーシップ推進ひろば、クリーンアップ蒲生、小浜耕治、佐々木孝行、佐藤友里、齊藤衣代、食育NPO「おむすび」、高橋英子、高島紗綾、松尾敏行、村上浩之

お知らせ

せんだいCARES2008 NPOスマイルウィーク ～ECOステージ&NPO+CSRブース～



入場
無料

開催日:平成20年11月11日(火)～16日(日)
場 所:電力ビル1F東北電カグリーンプラザ
<http://blog.canpan.info/sendai-cares/>

加藤哲夫の NPO経営相談

開催日:平成20年11月20日(木)

平成20年12月19日(金)

平成21年 1月19日(金)

開催時間:13:00～17:00

場 所:せんだい・みやぎNPOセンター

相談料:2,500円(1時間単位、会員は500円引き)

※予約制です。まずはお電話を。

連絡先・振込み先など

特定非営利活動法人 せんだい・みやぎNPOセンター
〒980-0804 仙台市青葉区大町2-6-27 岡元ビル4F
TEL:022-264-1281 FAX:022-264-1209
E-mail:minmin@minmin.org HP:<http://www.minmin.org/>

▼会費・寄付のお振り込みは、こちらへ！

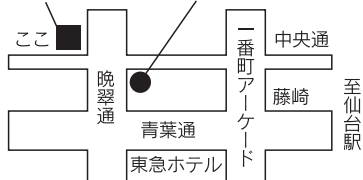
郵便振替:02260-3-16325

仙台銀行 中央通支店 普通 4094031

加入者:特定非営利活動法人せんだい・みやぎNPOセンター

発行:(特活)せんだい・みやぎNPOセンター

代表理事 大滝精一・加藤哲夫 1Fファミリーマート セブンイレブン
編集長:谷口恵子
編集班:紅邑晶子
発行日:2008年11月1日
デザイン:氏家朗



岡元ビル4F 仙台駅から徒歩15～20分

| 編 | 集 | 後 | 記 |

はじめまして！60号の編集を担当した谷口です。今回、無事発行することができたのは、“ウッチー”こと、内川奈津子前編集長が土台を作ってくれたおかげです。感謝！！そして1年間、お疲れ様でした。「ぱれっと」でもその華麗なる手腕を発揮して下さいね。(谷口)

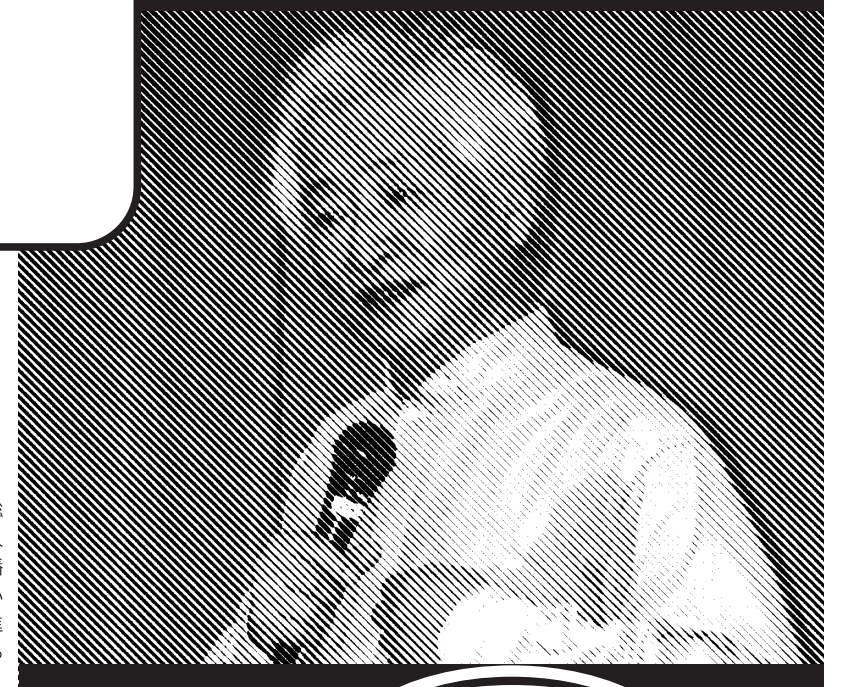
記念講演での播磨さんのお話は、NPO法ができて10年になるいま、もう一度NPOって何かを改めて問う機会になりました。さて、ことしで6回目のせんだいCARES2008が始まりました。実行委員会では、11月11日(火)～16日(土)は電力ビル1階でNPOスマイルウィークを開催。今年のテーマは「環境」。また、16日はサポセンとタイアップして「災害」をテーマにシンポジウムを開催。秋の一日、NPO日和にして出かけてみませんか？(紅邑)

みみん



【題字】谷川俊太郎さん

第10回通常総会記念講演 播磨靖夫(はりまやすお)さん



9月6日に行われた通常総会記念講演では、財団法人たんぼの家理事長の播磨靖夫さんから話をいただきました。テーマは、「進んでいるか 遅れているかを超えて」

「出口の見えない閉塞的な時代に生きている私たちに必要なのは、問いの解決ではなく問いの生成に価値を見出すこと。先に先にと問うという思考が強まる時代に、答えを急に出さず、問いを最後まで引き受ける生き方を大切にしたい」と播磨さん。記念講演では、その生き方にこそ、永遠の問いに対する答えがあるのではないだろうかと思いつけられました。

■目次

- P2…… 第10回通常総会報告
- P2～4 第10回通常総会 記念講演「進んでいるか 遅れているかを超えて」報告
- P5…… せんだい・みやぎNPOセンターの事業から(2008年8月-9月)
- P5…… チョットかじってみよう！CSR 第4回
- P6…… 寄稿『NPO実験室』=『NPOくまもと』です。 上土井 章仁さん
- P6…… 理事リレーコラム「私と市民活動10年」新川達郎
- P6～7 新理事紹介
- P7…… 活動ダイアリー
ランチLive“パスタでも、おにぎりでも”第4回
- P8…… 新規会員・継続会員、編集後記、おしらせ、連絡先等

「進んでいるか 遅れているかを越えて」

■日時:2008年9月6日(土)16:00~17:30

■場所:仙台市市民活動サポートセンター

■講師:播磨 靖夫さん(財団法人たんぼぼの家理事長)

日本のNPOは今、理念がなくなり、価値を実現するプロジェクトに代わって、「市場化と自己規律化」の文化が主役となっています。そこでは「進んでいるか」「遅れているか」が評価の尺度となっており、その結果として理念の活動が現実には追い抜かれる事態が起きています。NPOを自己実現の手段目的に掲げながら、その可能性を狭めている今の状況があります。「財団法人たんぼぼの家」の32年間にわたる活動、そこから生まれた社会変革のための芸術運動「エイブル・アート」の可能性について、播磨靖夫さんにお話をいただきました。

■「たんぼぼの家」活動の軌跡

私が理事長を務める「財団法人たんぼぼの家」は、1976年に設立されました。1970年代というのは、高度経済成長の真っただなかで、障がいのある人に対する偏見・差別も大きいものでありました。奈良という土地は保守的で、市民運動に対する意識も薄く、しかも大きなメディアも企業もなく、経済的な基盤が弱いところでした。そんな奈良で、社会の意識を問い直していく「たんぼぼの家」の運動を始めたのは、養護学校を出ても行くところがない重度の障がいのある子どもたちの母親たちでした。

設立前年の1975年には、養護学校の生徒が書いた詩に音楽好きの若者たちがメロディーをつけて、みんなで歌う「わたぼうしコンサート」を奈良県文化会館大ホールで行い、大きな反響を巻き起こしました。翌年には「わたぼうし音楽祭」に発展。今年の夏も33回目の音楽祭が行われました。この音楽祭には、スターはいません。アマチュアや、無名のふつうの人々でつくりあげています。行政からもあまり援助がなく、中小企業、飲み屋、喫茶店などから広告をもらって開催しています。このように大きなスポンサーはなくても、町の人々の支援のもとで開催され、しかも今や「市民の文化」として確立しています。今では町の人たちがその精神を支えていく、生活になくはならないものとなっています。

90年代にはアジアの都市に広がり、2年に1度のペースで開催されている「アジア太平洋わたぼうし音楽祭」に発展していきました。この音楽祭のように、運動と事業をリンクさせて、成り立たせてきたポイントは、まず、障がいのある人たちの取り巻く現実と時代状況を分析したことです。国連の国際障害者年が終わった時、日本のバブルは崩壊していましたが、アジアの国々は経済成長を遂げて、お金が集まるようになっていました。2つ目は、文化

戦略というアイデアが斬新だったこと。これは社会的なインパクトがありました。3つ目は、確かな情報にもとづく構想力があつたことです。各国のNGOと手を結んで、構想力を高めていきました。そして4つ目は、やる気ですね。思想が確立し、精神が充実していれば、気力が漲ってきます。私の英語力は中学生レベルで

第10回通常総会終了

9月6日(土)、当センターの「第10回通常総会」が開催されました。司会の黒澤理事より議長の選任を行い、議長、大滝代表理事のもと総会成立を確認、その後、議事録署名人を白川由利枝さん、小浜耕治さんにお願ひしました。

最初に第1号議案「2007年度の事業報告と決算報告について」、第2号議案「2008年度の事業計画と予算案について」、第3号議案「理事・監事の選任について」は、すべて満場一致で承認されました。これまで理事としてご活躍頂きました川村志厚さんと横山英子さんは、任期満了によりご退任。新理事には、西出優子さんと渡辺一馬さんが選任されました。

また、顧問・参与の新しい規程をつくり、川村志厚さんには顧問に、江幡正彰さん(社団法人宮城県情報サービス産業協会、株式会社アート・システム会長)には参与をお願いすることになりました。

なお、総会終了後、所轄庁、法務局、税務署等への届出を9月中旬に完了しましたことをご報告いたします。(遊佐さゆり)



すが(笑)、あちらこちら歩き回って話をまとめていくことができました。しかも海外の人々と一緒にやることによって、私たちの思想が鍛えられました。アジア太平洋のネットワークができ、市民活動の広がりが生まれました。

そして2004年には、日本で初めての障がいのある人がアート活動を行う施設「アートセンターHANA」をオープンさせました。できないことを悔やむよりも、できることに集中する。そこから可能性を開花させるのが目的です。「アートセンターHANA」には、カフェがあり、地域の方たちがふらっとコーヒーを飲みに来ます。ギャラリーもあり、内外の障がいのある人の展覧会や、ハンセン病回復者の写真展も行いました。「アートセンターHANA」は、障がいのある人のアートセンターではありますが、コミュニティー・アートセンターでもあります。

■障がいのある人の芸術活動「エイブル・アート」の可能性

「エイブル・アート」を提唱した1995年は、阪神淡路大震災があり、その翌年にはオウム真理教によるテロ事件がありました。バブル崩壊後で、日本人は自信を失っていました。私は、アートには人の精神を鼓舞する役割があるのではないかと考えていたので、障がいのある人の表現活動からさまざまな可能性を見出し、人間性を回復する新しい芸術運動(エイブル・アート・ムーブメント)の取り組みを始めました。

それにはまず、企業回りをして、資金集めを行いました。最初にエイブル・アートを支援したのは関西電力で、展覧会を開く一方、「ABLE ART-魂の芸術家の現在(いま)」という本の出版資金を出してもらいました。この本には英訳文もついていて、海外の多

くの人々にもエイブル・アートを知ってもらおうきっかけとなりました。

1997年には大成建設がスポンサーになって、東京都美術館において、障がいのある人の作品を展示する大規模な展覧会「エイブル・アート'97東京展『魂の対話』」を行いました。また、トヨタ自動車がスポンサーとなってエイブル・アート・フォーラムを7年間全国各地で行いました。このような企業とのコラボレーションで、少しずつエイブル・アートへの関心が高まっていき、たんなる福祉のアートではなく、現代アートと捉えられ、脚光を浴びるようになりました。

これまでは、障がいのある人の問題は、「社会史」のなかで語られるものでしたが、エイブル・アートによって、「文化史」のなかで語られるようになったのです。それまで、障がいのある人のアート活動というと、余暇活動のひとつだと思われていましたし、社会からも「福祉」というフィルターを通して見られていたので、アートとしての価値は低いと思われていました。障がい者福祉というものが、生存権の保障から幸福追求権の保障に変わっていく社会変化がエイブル・アートの後押しをしました。ここでいう幸福というのは、本人が主体的に生きていくことを選択範囲が広がるということです。それはまた、障がいのある人の表現活動という枠を越え、「市民の文化力」を高めていくことを目指す運動でもあるのです。市民社会の文化というのは、一人ひとりが好きなものを追求し、さらに他人の好きなものを尊重することだと思っています。エイブル・アートというものは、限定を拒絶する無限の活動で、特定のものに囲い込んだり、レッテルを貼るものではありません。エイブル・アートは、人間の存在の不思議さを問うているものなのです。



■オーディット文化が支配する今のNPO

現在、全国のNPOセンターはたいへんな状況にあって、悲鳴が聞こえています。今から10年前に特定非営利活動促進法が成立し、一気にNPOの数は増えましたが、地殻変動を起こす力は、弱くなっています。「NPOには3Bが足りない」という人もおられます。3Bというのは、ボディ (body)、ブラッド (blood)、ブレイン (brain) のことで、いずれも組織の基本となるものです。さらには先に先という掛け声ばかりがNPOを追い立てています。また、NPOの内部で飛び交っている言葉も「ISO」「CSR」などのように横文字が多く、何を意味しているのかわからない場合さえあります。

これは、市場化(グローバル化)と自己規律化の波がNPOの世界にも来ていて、オーディット文化が支配しつつあるということです。オーディットというのは、会計監査という意味です。売買行為の妥当性を検証するもので、市場経済から出てきた言葉です。どのような機関もさまざまな立場から評価・報告するという文化が広がっています。

NPOも社会的責任を問われ、評価書・報告書が社会的な活動に必要な、自己点検・自己評価・自己規律化といった説明行為を行う一方、他者にも求めるようになりました。

ですから、それを実行することが「進んでいる」、実行しないことが「遅れている」といわれるようになってきました。このような説明責任の増加は、事務の負担増加につながっていますし、そればかりに対応していると、NPOは組織が脆弱なため、社会変革を起こす力も弱くなっていきます。

オーディット文化のもとでは問題解決型の思考になり、テクノラートの人材が増えていきます。もちろん組織の透明度が上がると、信頼性も高まりますが、理念や理想がおろそかになってしま

います。遅れないように先手を打つが、それが何のためかわからない。オーディットに励んで、あるべき自分がわからなくなり、自己実現の実感がありません。大事なものを過去に置き忘れたのではないかという疑問も出てきていますし、今、社会に何が起きているかもわからなくなっています。

社会変革を目指すNPOになるためには、ミッションを今いちど再確認する必要があります。それは手段が目的になっていないかの点検でもあります。そして、異なる価値や利害を持つものがどう共生していくか、NPOの力量が問われています。進化論を唱えたダーウィンは、環境の変化に適応したものが生き残ると言いました。そのためには、理念の追求と同時に、全体を見通す目、「全体知」が必要です。知というのは、実際に現場に触れている緊張感や、集中力から生まれてくるもの。活動を豊かにするためには、深い知が組織になければなりません。それは、いろいろな場所に出かけ、知のスクランブルに出会わないと生まれてはこないでしょう。私は人間の構想力に賭けたいと思います。そして、現実と理念をつないでいく構想力を持ったNPOが少しずつ現れることに希望を見出しています。人間は何かをしようと思わなければ何もしないものです。それでは何のためにこの地上に存在するのかが問われてくるのです。(記録:布田剛 編集:谷口恵子)

■播磨 靖夫(はりま やすお)さんプロフィール

財団法人たんぼの家理事長、社会福祉法人わたぼうしの会理事長、エイブル・アート・ジャパン常務理事、特定非営利活動法人日本NPOセンター前代表理事。新聞記者を経てフリーのジャーナリストに。障がいのある人たちの生きる場所としての「たんぼの家」づくりと、自己表現していくことのできる社会づくりを市民運動として展開している。編著書に「共貧共存の思想」(日本青年奉仕会協会)、「みんな同じ空の下に生きている」(青也コミュニケーションズ)、「知縁社会のネットワーク」(柏書房)、「生命の樹のある家」(たんぼの家)ほか。

地域・テーマ公益ポータルサイト
推進プロジェクト
「情報開示セミナー＆
ワークショップ」

9月12日(金)、仙台市民活動サポートセンターにて、「情報開示セミナー＆ワークショップ」を開催。こちらのセミナーは、団体への信頼性を担保するための情報開示の必須項目や、共感を呼ぶための情報開示のあり方を学ぶことを目的にしています。(共催:日本財団・IIHOE[人と組織と地球のための国際研究所])

■情報開示セミナー概略の報告

講師の川北秀人さん(IIHOE代表)からは、「情報開示の意義と戦略的情報発信の極意」をテーマに、情報開示の重要性や必要性の基本から始まって、支援者・社会から求められる情報、情報発信における資金提供側とNPO目線とのギャップ、そして効果的な助成申請書の書き方に至るまで、たいへん貴重なお話をいただきました。

次に当センターの加藤代表理事からは、せんだい・みやぎNPOセンターにおける情報開示への取り組み(NPO情報ライブラリー・みやぎの公益活動ポータルサイトみんな)、日本財団の荻上健太郎さんからは、公益コミュニティサイトCANPANと効果的なブログ活用法についての紹介がありました。



■情報開示のあり方に気付く「ワークショップ」

その後、団体の情報開示のあり方と改善点に気付くためのワークショップを行いました。所属団体が違う4人ずつのグループに分かれて、紙に団体設立趣旨・目的、活動概要や実績を書き込み、他のメンバーがわかりづらいと思われる部分やアドバイスなどを付け加えました。グループディスカッションでは、お互いに取り入れたい部分や、反省点などを発表。終了後のアンケートでは「情報開示の意味と重要性を理解した」「いかに伝わらない情報発信をしているかに気が付いた」という感想が得られました。なお、この「地域・公益テーマポータルサイト推進プロジェクト」セミナーシリーズは、11月には「協働環境セミナー」、来年1月には「CSRセミナー」を予定しています。(小川真実)

チョット

かじってみよう! CSR。

4

～地域のCSRセミナーinせんだい
「地域に根ざしたCSRが社会を変える!」～

昨年に引き続き、8月30日(木)に仙台市民活動サポートセンターにて「CSRセミナー」が開催された。今年は、「地域に根ざしたCSRが社会を変える!」というテーマで企業・NPOを対象に実施した。参加者は、関係者も加えると60名近くとなり、「CSR」への関心の高さを示していた。基調講演では、ダイバーシティ研究所代表・田村太郎さんより「CSRの誤解! CSR≠社会貢献 信頼される企業のかたちとは」というテーマで最新のISO26000情報などについてお話いただいた。その後、(株)一ノ蔵さんより酒造メーカーとしての環境に関する取り組み(3R・米作り・ゼロエミッションなど)について、地域やNPOとの協働事業についてなどお話いただいた。(株)南光台金物からは、クールビズをいち早く取り入れたことが縁で宮城県の夢ファンドに寄付をすることになった経緯、その取り組みに社員全員が楽しみながら参加したことなどお話いただいた。パネルディスカッションでは、いずれも特別に「CSR」を意識せず、よりよい企業であるために取り組んだことが結果的に企業が社会で果たすべきことを自然に実行していたということだということだった。会場に起こしただいた企業の方々からもそれぞれのCSR感や取り組み事例についてお話いただいた。昨年のCSRセミナーにご参加いただいたイトス(株)からは、「CSRプラス大賞にエントリーされたことを新たなセールスポイントとして活用してみたところ、仕事の上でプラスになる点が増えた。」というコメントを。ほかにも、ヤマト福祉財団がNPOと協働して行なっているメール便配達のお話や(株)ハリウコミュニケーションズの教育CSRへの取り組みなど、本業を活かして新たなチャレンジとして行なっている事例をいくつかご紹介いただいた。(紅邑晶子)



●全国の支援センターから

「NPO実験室」=「NPOくまもと」です。

(特活)NPOくまもと 代表理事 上土井 章仁さん

「NPOくまもと」は、基盤整備組織として2001年に発足しました。事業は、情報の循環や人材養成講座・政策提案などを行っていますが、基本的には「してみせやん!※」です。「NPOくまもと」単独でも他のNPOさんとの協働でも、小さな成果の事例をつくって積み重ねていくことを心がけています。

協働事例として、昨年3月「廃校を活用した多機能型複合施設『南風ん風(はえんかぜ)』による地域再生～語る・ふれあう・助け合うみんなの施設～」が地域再生法に基づく地域再生計画の第6回認定を受けました。「特定非営利活動法人ひと・学び支援センター熊本」によって立案から廃校改造工事の入札を実施し、管理運営を行っています。現在、民間レベルで市民活動の拠点を担うようにがんばっています。

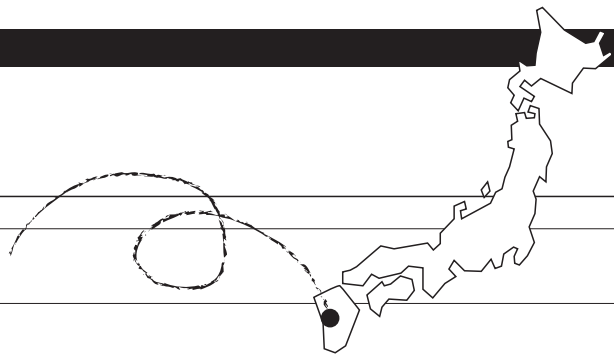
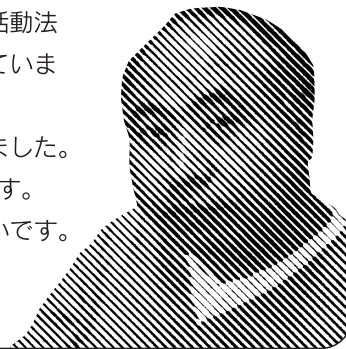
また、小額ながら「NPOくまもと」の事業費を社会還元しようと「成長するNPO支援事業」を始めました。

NPOさんが成長するための調査研究や事業の基礎となるものを協働でやっというものです。

NPOにできることを証明していきます。社会にNPOの多様な可能性を見出してもらえれば有り難いです。

「NPO実験室」、それが「NPOくまもと」です。

※「してみせやん!」は熊本弁。「やっしてみせなきや」の意味。



●理事リレーコラム

「私の市民活動10年」 新川 達郎 (同志社大学大学院/総合政策科学研究科教授)

せんだい・みやぎNPOセンターが10年を歩めたこと、そして私自身がその準備段階から関わって今日まで運営に関わることができたことは、改めて、たくさんの人に支えられての10年だったことを感じさせられています。もちろん設立の準備、あるいはその芽が出ようとしていたときには、もっと多くの人から応援をいただき、時には足を引っ張ってくださったことで、今があることを思い起こしています。その後の期間もまた、市民が中心にいたることができる社会、市民自身のための市民の社会とは一体どのような社会なのか、それをごく身近なところから模索してきた10年余りであったようにも考えています。

古い話になりますが、30年も前の大学院生時代に、公害反対運動・環境運動についてどちらかといえば研究関心からでしたが身近になり、その後ムラオコシやまちづくりのグループとともに活動をするようになり、そして20年以上前の仙台で、不思議なことに当時は市民運動不毛の地と呼ばれていたのですが、ふたたび環境やまちづくりの活動に出会うことができました。その中での最近の10年は画期的でした。仙台でも日本全国でも、市民活動が当然のことと考えられるようになり、応援しようという人たちも増え、社会の仕組みも整ってきました。市民の力が社会の表舞台に出た10年でもありました。

この10年で市民の力が大に発揮されるようになり、多様な市民活動が発展し社会全体が変わってきたということについて、私自身は確信を持っています。しかしそれは、資本主義市場や代議制民主主義に相応するところまで成長していません。市民活動による市民社会づくりの目標は未だ遠いのですが、それでも歩み続けることしかないと考えています。

新理事紹介

2008年度、新しく当センターの理事に就任した、お二人のご紹介です。

西出優子さん
＜出身地＞ 沖縄県



日本NPOセンターや米国ユナイテッド・ウェイなどでの活動を通して、自発的に地域の課題解決に取り組み社会を変えていくNPOの役割について考えてきました。2007年より東北大学大学院経済学研究科で非営利組織論を担当。学生がNPOを理解し関わりをもつように努めています。理事として、地域のいろんな人や組織がつながり、新たな社会的価値を生み出すお手伝いをしていきたいです。どうぞよろしくお願いいたします。

■活動ダイアリー

当センターでは7月よりスタッフがNPOの活動現場へ行き、実際の活動を体験する研修を行っています。今回の活動ダイアリーは、「(特活)あかねグループ」さんでの、内川奈津子さんの研修風景を覗いてみたいと思います。

(特活)あかねグループ

1982年設立。日々生活する地域において、住民の誰もが気軽に参加できるボランティア活動の場を提供。並びにお互いの助け合いの心により、高齢者が在宅でより生き甲斐の持てる暮らしを実現できるよう、配食・介護などの事業や学習の機会を提供している。

■8月28日(木)

今日は初の調理場研修。あの「あかね弁当」がどのように作られているのか、いよいよ体験する日です。まずは、食材の下ごしらえから…。昼と夜のお弁当調理が、ほぼ同時並行で行われているため、200食近いお弁当の材料で厨房が食材の山。それをひとつひとつスタッフの方に教わりながら食べやすいサイズに切り揃えていきます。朝から夕方までほぼ半日くらいは、立ちっぱなしで調理をしていたので、足がパンパン。配食サービスはお正月を除いて、毎日行われているなんて、本当に頭が下がります。それにしても研修というより花嫁修業に来ているような気になるのはなぜだろう? (笑)

■9月19日(金)

あかねグループの建物は、1階が調理場とサロン(喫茶)スペースで、2階は事務所になっています。今日はサロンでミニデイサービスのサポートに…。こちらでは、午前中は体操を、午後は歌を歌ったり、計算をしたりといろいろなレクリエーションを行っています。お楽しみのお昼ごはんはもちろん手づくりランチ。これも朝から準備をしているので、お昼が近付くにつれて、サロン内にはいい匂いが広がってきます。

すべての片づけが終わって2階に上がると、何やらスタッフの皆さんがそれぞれ。明日はお彼岸なので、お弁当に「おはぎ」が出るらしく、注文を受け付けていたみたい。私もおはぎを食べたいけれど、明日はサボセン勤務だから食べられない～! うー、悔しい。(内川奈津子)

渡辺一馬さん
＜出身地＞ 宮城県角田市



1997年、宮城大学一期生として入学。学生代表として、大学を創ってきました。また、サークル「デュナミス」に参画。そのサークルはWEBサイト制作などを通じて、学生自らが仕事を通じて成長をすることを目指して活動してきました。そのサークルを卒業と同時に会社法人化。学生と地域をつなげることをミッションとして、活動しています。理事として関わることで、この仙台をもっと面白くしていきたいと思っています。よろしくお祈りします。

ランチLive

紅邑晶子

第4回

「相手が喜ぶ情報とは」

青葉通りのケヤキが窓越しに見える、エクセル東急仙台1階のカジュアルダイニング「ラベニュー」。今日は、新しい企画についてランチミーティングです。

これからは、講座から相談つなげる流れを作っていきたいね。

相談って言うとなんかハードルが高い気がするから、お話を聞かせてくださいという感じ。聞かせてもらって、そこにこちらがお役に立つ情報があれば、提供するとか。

そうだね。確かにこのあいだもあるNPOの人と雑談をしていたら、いつのまにか相談になっていて、それなら今度こういう講座があるって紹介しました。

講座のあとに参加した団体には、その後もフォローがあるっていう「フォロー付講座」ってどうかな。わたしたちも力がつくと思うけど。

フォロー付ってわざわざ言わなくても、気軽に相談されるようにNPOの人から信頼される関係を作ることが大切じゃないかな。

話を聞くうちに、私たちが提供すべき講座とかサービスのヒントがいっぱいかんてくるよね。こちらがこんなことを考えているんだけどって、意見を聞くこともできるし、さっきみたいに提供したい情報を自然に紹介できたりするし。

付録で、おいしいレストランや面白そうなイベントの情報もいただける!

あるある。この間、ある講座で講師の人が話してた。成功した人は、相手が喜んだ分だけ成功するって。相手を喜ばせる事は大事。

助成金の情報も激辛カレーのお店情報も、どっちもNPOの人は喜ぶね。

うーん、激辛カレー情報は人によるんじゃないの?

というところで今日はおしまい。ランチbuffetは大人1980円のバイキング形式。お高めですが、産地直物の食材を使ったお料理がズバリ。「そんなに食べられないよ」と思っていたのに、素材のおいしさに惹かれて気がつくとは度々なくテーブルを立ててあれこれ食べておりました。